

2025 年 3 月 17 日

キルクーク油田開発契約－BP の戦略転換とイラクの早期石油資源活用の思惑が合致

一般財団法人日本エネルギー経済研究所

中東研究センター 副センター長

吉岡 明子

3 月 10 日に、イラクの石油省と英メジャーの BP 社は、イラク北部のキルクーク油田の開発契約に正式調印した。両者は 2024 年夏に MOU を締結し、2 月には契約の最終内容にも合意していた。その際、同社のウィリアム・リン副社長は、この契約は、世界で最も炭化水素資源が豊富な場所で新たな資源へのアクセスを提供するとして、世界中でポートフォリオを強化し、新たな成長機会を追求する同社の優先事項に合致するものだと語った¹。

契約の概要は、イラク北部に位置する大油田であるキルクーク油田並びのその周辺の油田において、既存の油井や施設の修復、新たなインフラ建設、新規掘削・探査、ガス拡張プロジェクト、400MW の発電所建設などを行うというものである。他企業とのコンソーシアムは組まず、イラク国営の北部ガス会社、北部石油会社と協力して事業を行うとしている。

キルクーク油田は 1927 年に発見されたイラク最古の油田の一つであり、最大の油田の一つでもある。最盛期には 140 万 b/d を生産していたが、戦禍の影響やメンテナンス不足、投資不足のため、現在の生産量は 20 万 b/d 強にとどまっている。BP とキルクーク油田の関係は深く、1927 年にトルコ石油会社がキルクーク油田を発見した時、BP の前身であるアングロ・ペルシアン石油会社は同社の共同オーナーであった。イラクの石油産業は 1970 年代に国有化されたが、2003 年のイラク戦争後、再び外資の参入が進んだ。BP も 2009 年から南部のルメイラ油田のオペレーターを務めている。キルクーク油田に関して、

¹ BP 社プレスリリース, 2025.02.25. <https://www.bp.com/en/global/corporate/news-and-insights/press-releases/bp-and-iraq-reach-final-agreement-for-redevelopment-in-kirkuk.html>

2010 年代に埋蔵量調査を行ったり生産拡張に向けた予備合意を締結したりしていたが、本格的な開発契約には至っていなかった。

このタイミングで BP がキルクーク油田に本格的に参入する決断を行ったのは、同社の路線変更と無関係ではない。2024 年 1 月に正式に BP 社の CEO に就任したオーキンクロス氏は、より短期的な収益が期待できる事業を優先し、それまでの積極的な再生可能エネルギーへの傾注から石油・ガス資産を再評価する方向へと方針転換を図っている。イラクのキルクーク油田は、老朽化が進んでいるとは言え BP が熟知する油田であり、2010 年時点で 90 億バーレルの埋蔵量が残されていた大油田である。平地に位置するため生産コストも比較的安価と考えられ、現在は停止しているトルコ向けパイプラインが再開すれば、輸出ルートも確保できる。将来的には世界の石油需要が減少に転じるとしても、それまでに十分な収益を上げることができるという判断があったものと思われる。イラク国内でもキルクーク近辺は今でも治安上の問題が払しょくされたとは言い難い地域であるが、それでもテロ事件が頻発していた 2010 年代と比較すると、治安状況は格段に改善された。政治環境が落ち着いてきたことも含めて、BP はイラクへの参入の好機と判断したのだろう。

今回の契約は、イラクにとっても石油資源の早期有効活用に向けた重要なプロジェクトである。イラク政府はその財政の 9 割を石油輸出収入に依存している。こうした過度な石油依存から脱却し、脱炭素戦略を推進すべく、構造的ガス田の開発や太陽光発電プロジェクトなどを徐々に進めているものの、未だ動き出したばかりであり、水素や原発などの脱炭素エネルギーの多くは未だ検討段階にある。イラク政府は新たな経済の柱として、南部のバスラ港から北部のトルコ国境に至るまで道路と鉄道を整備し、スエズ運河に代わる一大物流ルートを構築するという「開発道路」構想を打ち出したが、その実現にはまだ長い時間がかかることが避けられない。こうした石油依存からの脱却や経済の多角化を進めるためにも、足元の石油資産を重要な資金源として早急に有効活用することが必要不可欠であり、BP の参入はイラクにとっても貴重な機会となるはずである。

お問い合わせ: report@tky.ieej.or.jp